

総力特集

東海地方メディアの雄

インターネット時代の到来で大衆伝達媒体としての新聞、テレビの役割がいま大きく問い直されつつある。そこで地元マスコミ界のトップの方々に登場願ひ、これまでに各社がマスコミ界の一員として果たされてきた役割、その変容、さらにその未来等々について聞いた。平成から次の御世へ。最後で最初となる記念すべき2019年の幕開けに、地域文化をけん引してきた各社トップは異口同音に「地元主義」「地域を大事に」といったキーワードを挙げた。(聞き手/中部財界フォーラム社代表取締役塚本隆)

中日新聞社 大島 宇一郎代表取締役社長インタビュー

果たすべき役割を続け 新たなものを提供していききたい

中日新聞社は常に言論界のトップリーダーの一員として地域文化をけん引してきた。しかし、インターネットを使った大衆伝達媒体の多様化の影響を受け、新聞発行事業も難しい時代を迎えている。

——この地域における中日新聞が果たしてきた役割についてどのように考えておられますか？

大島 一三〇年余りこの地域で新聞を発行してきました。基軸は報道です。報道によって豊かである

い地域づくりに貢献してきましたし、時にはいろんな社会問題も報道してきました。現在では名古屋本社管内だけで二七銘柄の地方版を作るに至り、きめ細かい地域の情報から国政、国際情報まで報

道する体制になっています。地域の皆さんにとってなくてはならない新聞としての役割を果たそうと努力してきました。文化の発信、スポーツはもちろん、「ニュースを作る」という観点からも各種事業に取り組んできました。たとえば古い話でいうと、一九五八年には子供の命を守れと「危ない遊び場一掃運動」というキャンペーンを中部九県で展開、六一年には伊

勢湾台風禍の堤防護岸の手抜き工事のスクープや一連の不正追及報道で新聞協会賞をいただきました。このように地に足の着いた報道でこの地域の暮らしを豊かに安全にということに貢献してきました。記者が取材し、第三者の目で事実を確認し世の中に出すという情報の信頼性という点に対しては、たとえばインターネットの時代であってもわれわれはまだまだ努

力をして行かねばならないと思っています。経済関係でいえば、中部総合開発推進委員会という組織を六三年につくり、中部圏を強く意識した報道をずっと続けていく中で中部圏知事会議につながっていきました。また、「中部新空港会議」を立ち上げ、有識者の会議やシンポジウム開催などを通じて中部空港の建設の機運を盛り上げました。

——新聞の果たす役割が今後変わっていくとすればどのような変わっていくのでしょうか？

大島 本当に必要な記事、読者が読みたいと思っただけの記事があるとして、ネットに載っているから読むけど紙に出ているから読まないという選択肢はあるのでしょうか？ なののために新聞を讀みますか、という根源的なところをもっと突き詰めた。読者が減少しているのは、読者が求めているものに新聞がしっかりと応えていない点があるのではないかと。私はそのような問題意識がすごく強い。読みたい記事なら紙であろうとネットであろうと読んでいただけだと思っています。

ネットと新聞とどちらが記憶に残りやすいか。韓国はネット社会化が進み教育現場でもICT(情報通信技術)の活用が活発ですが、ICTを導入した教育現場で調査をやったことがあります。その結果、記憶については紙媒体が有利とわかりました。一方で動画を見せられやすいので理科の実験などはICTが有利との見方が示



大島 宇一郎 (おおしま ういちろう)
1964年4月生。87年早大政経学部卒、中日新聞社入社。東京本社編集局政治部、経済部、アメリカ総局、管理局人事部など歴任のあと2013年取締役、15年常務取締役・東京本社代表、17年社長に就任。



されてきました。つまり、紙と動画と各々の長所を生かしたメディアミックスが大事だとされたわけです。ジャーナリストの池上彰さんが言っておられるが、新聞は読む、ネットは見る。読むとは情報を読んで噛み砕いて頭に入れる行為ですね。そういった底堅い読者層をつくっていききたい。果たすべき役割はこれからも続け、新たなものを提供していききたい。その核

となるのが報道。情報の伝達ルートの変化によって新聞の作り方が大きく変わるといことは避けたいし、抵抗できるところは抵抗したい。ネットの利便性を生かしたことも思う。一例をあげると、中日新聞は地域、コミュニティのベースに応じて地方版を作っている、と言いましたが、ネットの時代はその地域割りを越えてコミュニティができていく。そういう方々に中日新聞は情報発信できているのか。地方版の地域割りには限界があるということではないか。そういう環境にあつて、新聞社はどのような情報を提供しているのか。不易流行と言いますが、やはり、変えてはいけないところは変えない。ここはとても重要な所です。

——部数減への対策はどのように考えておられますか。

大島 新聞の売り方は、販売店を通じた戸別配達の基本です。これが、中日新聞社の地域密着の原点でもあり、土台です。そこをより強化していききたい。たとえ地域での個々の読者のつながりが希薄

になつて来た中でも、逆に新聞販売店をキーにして、地域のコミュニティに入る。その媒介として新聞を使つていただき、より地域に溶け込んでいきたい。今までもそうしてきましたが、もっと強化していきたい。地域に深く溶け込んでいる販売店ほど善戦しているのです。ミニコミ紙を作つたり、お祭りを手伝つたりといった形で地域づくりへの参加をもっと積極的にしていく。そうすれば販売店も新聞ももっと地域に信頼して頂ける存在になるのではないかと。

新聞販売店にも手伝つてもらつて、NIEという運動にも取り組んでいます。お子さんを対象に、新聞の作り方や役割を説明したり、記事の切抜きを模造紙に貼つて自分たちの新聞をつくつてもらつたりする「出前授業」は昨年度三〇〇校以上もやつている。中には自宅に帰つて「お母さん、うちも新聞とつてよ」という家庭もありますよ。保護者へのアンケートでも、子どもに新聞を読ませたいというおうちが過半数あるんです。需要があるので、未来

の読者を対象に業界挙げての取り組みを地道にやつていきたい。

——大学との連携もやつておられますね。

大島 大学と協定を結び、寄付講座という形で現場に立っている記者や営業の社員を派遣しています。リアルなお話をさせていただくことでメディアとはどういうものか、新聞はどういう活動し、どう作られているか、どうご利用いただくかということをやっています。今では七大学で実施しています。

打てば響くのは就職活動を始めた学生から若手社員ぐらまでですね。いろんな角度で自分が今まで関心を持たないことでも知る必要に迫られる立ち位置になってくる。そこへのアプローチは大事ですね。二〇一八年九月から「中日新聞社の人材研修（ビジネスストレーニング）」と称して企業研修も始めました。雑談力から文章の書き方、新聞の読み方についてなど九つのメニューから選んでいた。十一月から年度末までに三〇件ほどの実施が決まっています。若手社員対象のオーダーが多

いのですが職制研修もご利用いただいています。最初に豊川信用金庫で始めていただいたのですが、結構反響がありました。一般の会社からの研修も受け入れていて、取材や整理記者などの経験を通して、メディアとは何かを勉強していただき、さらに文章修業もしていただいています。

——中日新聞社は、中日ドラゴンズを経営され、ナゴヤドームはドラゴンズだけでなく大きな音楽イベントには欠かせない場となっています。また、栄の中日ビルの建て替え計画も進んでいて新しいビルができるのかと楽しみみの声も聞かえてきます。こうした文化的な取り組みについては――。

大島 情報はいくらかもあるという時代にあつて、多くの方はリアルな体験を重視されているのではないのでしょうか。野球も生で見たら迫力がある。ドームでのライブはアーティストとのリアルタイムの空間の共有でやはり感動する。展覧会では本物を見る感動を味わえる。こうしたリアルな体験の提供が大事で、新聞社がノウハウ

ウを作り上げてきたし、もつと育てていきたい。二〇一八年はアイドルグループを集めて「中スポ音楽祭」を実施、ナゴヤドームでは「AKB世界選抜総選挙」も共催しました。伝統文化を大事にしていくのはもちろんです。さらにもドームはできてから二年、毎年のように投資して皆さんに喜んでいただけるように改善を続けて来ました。一八年シーズンは、松坂大輔投手にきてもらったこともあり、観客増になりました。来シーズンは与田剛新監督となり、地元逸材根尾昂君らも入りました。チーム力も上がつて期待してもらえんと思えます。地域の方々にもつと応援して頂ける存在になりたい。中日ビルは、一九年の三月に閉館です。概要を公表したところです。ビジネス拠点でもあり、名古屋の中心にふさわしいビルにしたい。

——最後に、新聞社に就職を希望している若者に、中日新聞社の特長をアピールしてください。

大島 今の若い人たちは、ソーシャルメディアやネットが飛び交っているなかで育っています。

フェイクニュース、意図的な情報、事実に基づかない情報もあるなかで、新聞はかたくなに事実を追いかけて、確認し、考え抜いて世に問うという仕事で、その重要性は高まっています。意義のある仕事だと思つています。それを担いたいという若者に来てほしい。先にも言いましたが、東京にも取材拠点が、地域に根差した販売店網を土台に、支局・通信局といった取材網も地域のニュースをきめ細かく追いかけています。海外にも一〇カ所以上の総・支局があり国際ニュースをフォローしていますし、政治・経済・スポーツ・科学・社会も含めて間口の広い新聞社なので充実した報道活動ができるチャンスがある。その中で取材力、筆力を伸ばし、成長を手助けする先輩もたくさんいる会社なのです。編集以外の部門でも、本社とドラゴンズのコラボで、ドラゴンズグッズを本社で製作したり、事業面では、名古屋ウイメンズマラソン、大相撲名古屋場所を主催したりしています。昨年は「至上の印象派展 ビュールレ・コレク

ション」や「モネ それからの100年」といった美術展も非常に多くの方々に来ていただいた。デジタルに対する取り組みが不熱心と言う指摘もありますが、東京新聞デジタル版を発行もしています。夢チューブと言うクラウドファンディングもやつてます。

新聞社の仕事ですから喜怒哀樂をあわせもつていきたい。私自身は「明るく何でもやろう」という方針で、わいわいがやがや明るく何でも話し合つたりアイデアを出し合つたりできる会社です。

NIE Newspaper in Education (教育に新聞を) の略。学校などの教育現場で新聞を教材として活用し、新聞への興味や理解を広げる取り組み。一九三〇年代にアメリカで始まり世界的に発展し、日本では八五年の静岡での新聞大会で日本新聞協会が提唱し本格的にスタートした。

新中日ビル 中日新聞社の発表によると名古屋・栄の中日ビルの建て替え計画の概要は次の通り。地上三十一階、地下四階、高さは約一七〇m。延床面積は一万三〇〇〇m²。ホテル、商業施設、貸しオフィス、多目的ホール、駐車場などが入る計画で完成時期は二〇二四年度を予定。